

Hej!

YEC（若者エンパワメント委員会）

スウェーデン王国視察報告書

YEC（若者エンパワメント委員会）

はじめに

地方における人口減少、18歳選挙権の実現、子どもの貧困など、国内の若者を取り巻く社会環境は大きく変化している。宮本みち子（放送大学）が「若者政策は流行り言葉ではない」と指摘をするように、国内における若者政策は労働政策やニート引きこもり支援など短期的なイシューベースなものであり、多様化する社会環境に対応する分野横断的な若者政策が求められている。

今回、YEC（若者エンパワメント委員会）が視察に訪れたスウェーデン王国は、分野横断的な若者政策を持ち、ヨーロッパ諸国の中でも先進的に若者分野に取り組んでいる国である。大きな局面を迎えている日本にとって、スウェーデンでの学びは大きな示唆となった。

また、この報告書は静岡県立大学の公認サークルであるYEC（若者エンパワメント委員会）のスウェーデン視察メンバー8名の共同執筆で書かれている。今の日本社会を生きる私たちが、スウェーデンで何を感じ、何を学んだのかを、若者目線から報告できることを嬉しく思う。

この報告書がきっかけとなり、日本の若者が「社会のつくり手」になることを祈っている。

副代表 土肥 潤也

目次

| | |
|---------------------------------|-----------|
| 第1章 概要 | 6 |
| 1. 謝辞..... | 6 |
| 2. 調査概要..... | 6 |
| (1) 視察目的..... | 6 |
| (2) 視察概要..... | 6 |
| (3) YEC（若者エンパワメント委員会）について..... | 8 |
| 第2章 スウェーデンの若者の意識調査 | 10 |
| 1. スウェーデン・日本の若者意識調査..... | 10 |
| (1) アンケート調査概要..... | 10 |
| (2) 男性と女性の割合、年齢別（スウェーデン）..... | 11 |
| (3) スウェーデン、静岡での回答の比較..... | 12 |
| 第3章 地域における若者参画 | 19 |
| 1. ユースセンターとは..... | 19 |
| (1) ユースセンターとは..... | 19 |
| 2. Fryshuset（フリースフューセット）..... | 20 |
| (1) 施設概要..... | 20 |
| (2) 活動について..... | 21 |
| 3. BIRKAGARDEN（ビルカガーデン）..... | 25 |
| (1) 施設概要..... | 25 |
| (2) ビルカガーデンの歩み..... | 25 |
| (3) 施設について..... | 26 |
| (4) 設備..... | 26 |
| (5) 活動内容..... | 27 |
| (6) ユースワーカーの紹介..... | 31 |
| 4. KFUM Jönköping..... | 32 |
| (1) 概要..... | 32 |
| (2) YMCA とは..... | 32 |
| (3) 施設の詳細..... | 33 |
| (4) 活動内容..... | 33 |
| (5) その他のプログラム..... | 34 |

| | | |
|------------|--|-----------|
| 5. | 穏健党青年部ヨンショーピング県支部..... | 36 |
| (1) | 穏健党 (Moderaterna) について | 36 |
| (2) | ヨンショーピング県 (Jönköpings län) の概要 | 36 |
| (3) | 穏健党青年部ヨンショーピング支部について..... | 37 |
| 第4章 | 全国的な若者組織・若者支援組織 | 40 |
| 1. | LSU 全国青年協議会 (National Council of Swedish Youth Organizations) .. | 40 |
| (1) | 概要 | 40 |
| (2) | 加盟団体との関係..... | 40 |
| (3) | 活動の目的と内容..... | 41 |
| (4) | 若者政策に対する LSU の動き | 41 |
| (5) | 政治との繋がり | 41 |
| (6) | LSU の政治的中立性 | 42 |
| (7) | 日本で若者組織の連合を作る際のアドバイス..... | 42 |
| (8) | LSU と若者団体の予算..... | 42 |
| 2. | Friends Program..... | 43 |
| (1) | 施設概要 | 43 |
| (2) | 活動内容 | 43 |
| (3) | プロジェクトの内容 | 45 |
| (4) | 対象 | 45 |
| (5) | 地域からの協力 | 46 |
| 3. | 子どもオンブズマン | 47 |
| (1) | 概要 | 47 |
| (2) | 組織について | 47 |
| (3) | 予算 | 48 |
| (4) | 活動内容 | 49 |
| (5) | 具体的な活動例 | 50 |
| 第5章 | まとめ..... | 51 |
| 1. | 日本への提言と視察メンバーから | 51 |
| (1) | 視察メンバーの感想 | 51 |
| | 参考文献 | |
| | 献..... | |
| | ... 55 | |

第 1 章 概要

1. 謝辞

本視察の実施に至るまでに多くの方々の協力をいただいた。視察の報告に入る前に感謝の言葉をお伝えしたい。

まず、昨年に引き続き、YEC（若者エンパワメント委員会）のスウェーデン視察にスカンジナビア・ニッポンササカワ財団に助成をしていただいた。2年連続で大学生を中心とする団体である私たちにこのような機会を提供していただけることに感謝したい。

次に、視察の全体的なコーディネート及び視察中の通訳をしてくださった両角達平氏には感謝してやまない。YECの創設者であり、現在はストックホルム大学大学院でユースワーク研究をする両角氏からは、スウェーデンでの機関訪問以外にも、YECの活動を進めていく上でのアドバイスをいただくことができた。

最後に、私たちを暖かく歓迎してくださったスウェーデンの各機関及び個人に感謝したい。

他にも、個人名を出せば書ききれないほど多くの方々からの協力があり、本視察は実施を実現することができた。この感謝を、活動のさらなる発展として形にしたい。

2. 調査概要

(1) 視察目的

世界的に若者参画をリードするスウェーデン王国を訪れることで、国内の若者参画の発展を目指すための示唆を得る。特に「地方創生」が叫ばれる日本に、スウェーデン王国の地方における先進事例を視察・研究することで、YEC（若者エンパワメント委員会）の活動地でもある静岡や、その他の地方における若者支援及び若者参加の具体的な方法の示唆を得る。

(2) 視察概要

(ア) 期間

2015年9月9日（火）～9月14日（水）

(イ) 参加者 (YEC メンバー)

| No. | 名前 (ふりがな) | 所属 |
|-----|-------------------|---------------------|
| ① | 土肥 潤也 (どひ じゅんや) | 静岡県立大学 3年、副代表・社会部 |
| ② | 秋山 千奈美 (あきやま ちなみ) | 常葉大学 3年、若者部サポートメンバー |
| ③ | 荒木 将英 (あらき まさてる) | 静岡県立大学 2年、若者部 |
| ④ | 鈴木 直久 (すずき なおひさ) | 静岡県立大学 2年、社会部 |
| ⑤ | 加藤 麻佑 (かとう まゆ) | 静岡県立大学 1年、若者部 |
| ⑥ | 魚取 あすか (うおとり あすか) | 静岡県立大学 1年、社会部 |
| ⑦ | 大野 彩佳 (おおの あやか) | 静岡県立大学 1年、社会部 |
| ⑧ | 横葉 美菜 (よこは みな) | 静岡県立大学 1年、社会部 |

※視察時の肩書きであり、現在のものとは異なる可能性があります

(ウ) 協力者

- 両角 達平 ストックホルム大学大学院 修士課程 (コーディネーター・通訳)
- 津富 宏 静岡県立大学国際関係学部 教授/YEC 顧問 (視察事前学習協力)

(エ) 訪問機関

| 日時 | 訪問先 | 担当者 |
|----------|-------------------------------|--------------------------------|
| 9月9日(水) | ● 子どもオンブズマン | Anna Ekström |
| 9月10日(木) | ● Friends program ● LSU | Celia Cox Rebecka Prentell |
| 9月11日(金) | ● Birka Garden ● Fryshuset | Oskar Norberg Martin Dworen |
| 9月12日(土) | ストックホルム中央駅にて、 街頭アンケート調査 | |
| 9月13日(日) | ● 穏健党青年部ヨンショーピ ング支部 | Jonas Ericson |
| 9月14日(月) | ● KFUM | Henrik Lindberg |

(3) YEC（若者エンパワメント委員会）について

(ア) YEC（若者エンパワメント委員会）とは

YEC（若者エンパワメント委員会）は、2009年に静岡県立大学内に発足した若者世代のエンパワーを目的に活動する学生団体である。現在は静岡県立大学、常葉大学、高校生のメンバーも含め約20名程度で活動している。

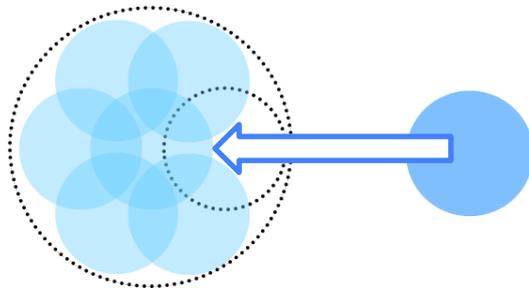
(イ) ミッション(活動理念)

「すべての若者が思いを形にすることを通じて、社会のつくり手となるために」

(ウ) YEC（若者エンパワメント委員会）の目指す社会

若者が社会に対して、「かやの外」のように感じているのではないだろうかということに問題意識を持ち活動している。特に中高生世代は、学校、部活、塾など、決まったルーティンの中で生活をしており、社会と関わる機会が少ない。内閣府が2014年に発表したデータの中でも、若者の社会参加（地域参加）が年齢を追うごとに減っていることを指摘している。また、YECが独自にしている調査の中でも日本の若者は社会に対して他人事で、自分自身が社会的影響力を持っていないと感じていることがわかった。

私たちの活動では、そんな若者たちを共に社会形成をする社会形成主体として若者のみならず、社会にも働きかけている。



左側の円を社会、右側の円を若者に例える。

日本の若者の心理的な社会からの疎外感をエンパワメントすることで左に戻すことが必要である。

エンパワメント（empowerment）の起源は、黒人の公民権運動であるとされている。力の欠如状態にあった黒人たちをエンパワー（empower）することにより、公民権の獲得につながったとされている。

英語にするとエンパワーの中には力(power)が含まれているが、エンパワメントは決して、外部から力を与えることではない。人間はみな生まれながらにみずみずしい個性、感性、生命力、能力、美しさを持っている。

エンパワメントとは、この本来持っている力を発揮できるように、①無力化されている本人に働きかけて差別や偏見があっても力を発揮できるようにすること、②社会全体に働きかけて差別や偏見を減らすことである。

YECの活動に当てはめると、若者自身に働きかけてその自己肯定感を高めることと、社会全体における若者に対する、ステレオタイプな(型にはまった)認識を変化させていくことが、エンパワメントであると考えている。

【YECの活動の様子】



▲社会について語り合う「若から」の様子



▲中高生世代の余暇活動支援「もうひとつの放課後探しプロジェクト」の様子

第2章 スウェーデンの若者の意識調査

1. スウェーデン・日本の若者意識調査

(1) アンケート調査概要

(ア) 調査目的

スウェーデン（ストックホルム）と日本（静岡）の若者の意識の違いを調査することで、日本の若者参加に対する示唆を得る。

(イ) 調査対象

13歳～25歳の若者を対象に、静岡市街地、ストックホルム中央駅を通る若者。

(ウ) 調査方法・場所

静岡市街、ストックホルム中央駅を通る若者に無差別に声をかけた。

(エ) 調査時期

ストックホルム：2015年9月12日 10:00～13:00

静岡：2014年5月25日 13:00～16:00

(オ) 調査内容

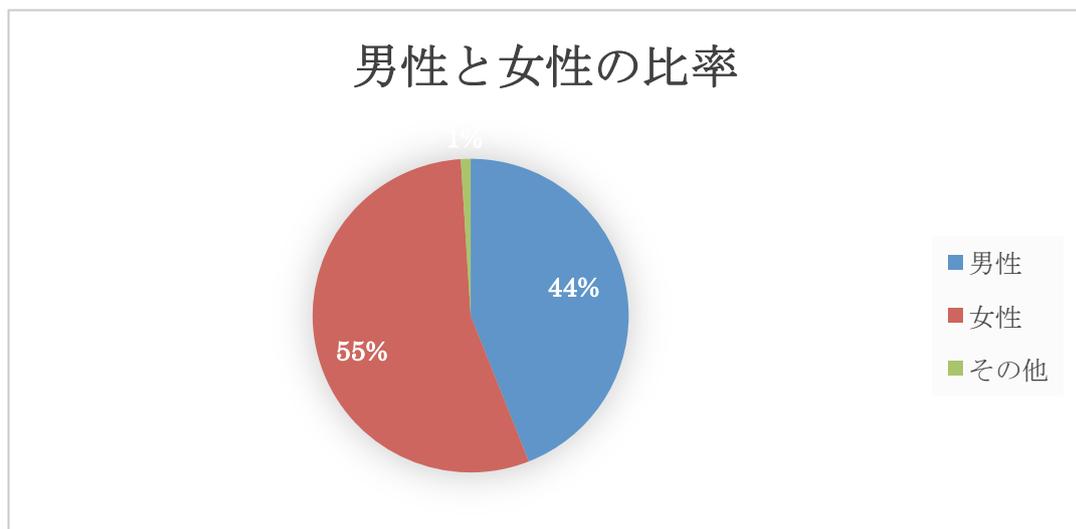
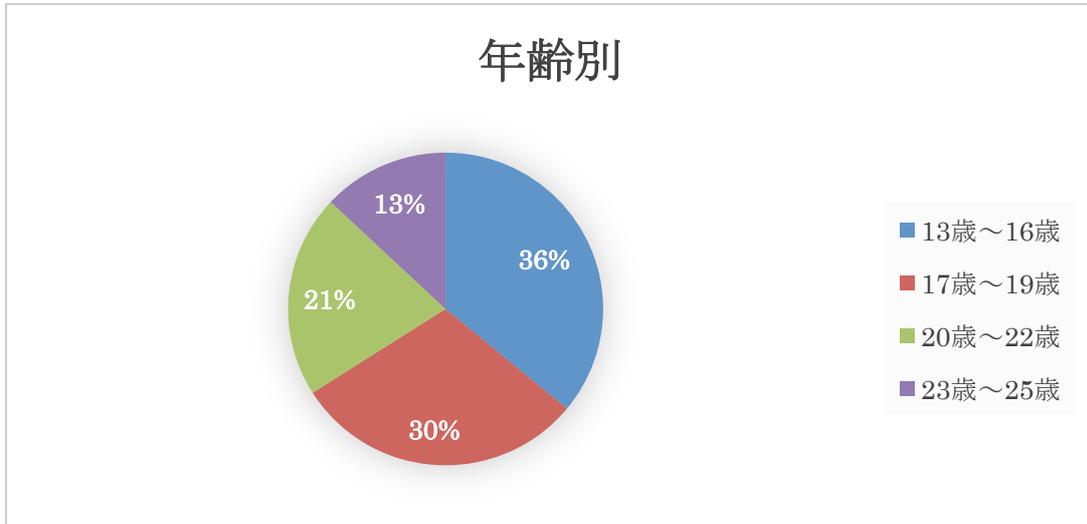
若者の自己肯定感、社会・政治への意識についてなど

(カ) 回答数

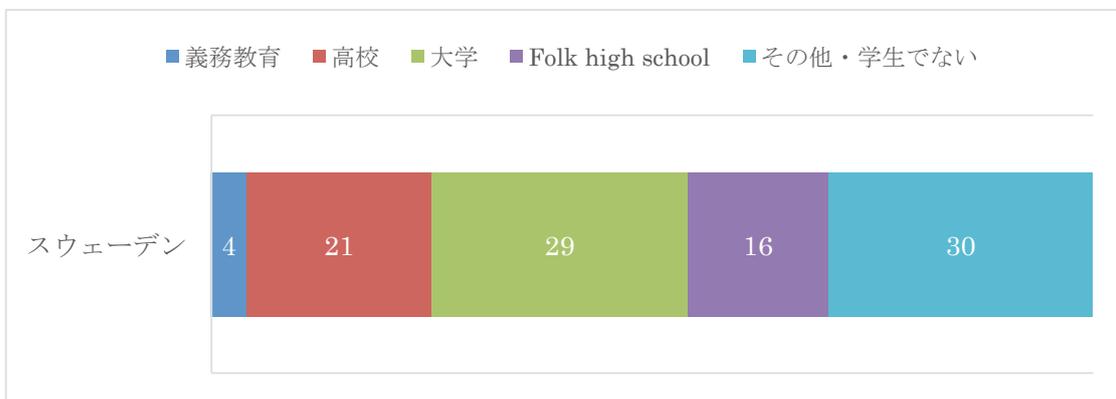
ストックホルム：100名（10代66名、20代34名）

静岡：166名（10代116名、20代50名）

(2) 男性と女性の割合、年齢別（スウェーデン）



(ア) あなたはどの学校に通っていますか？

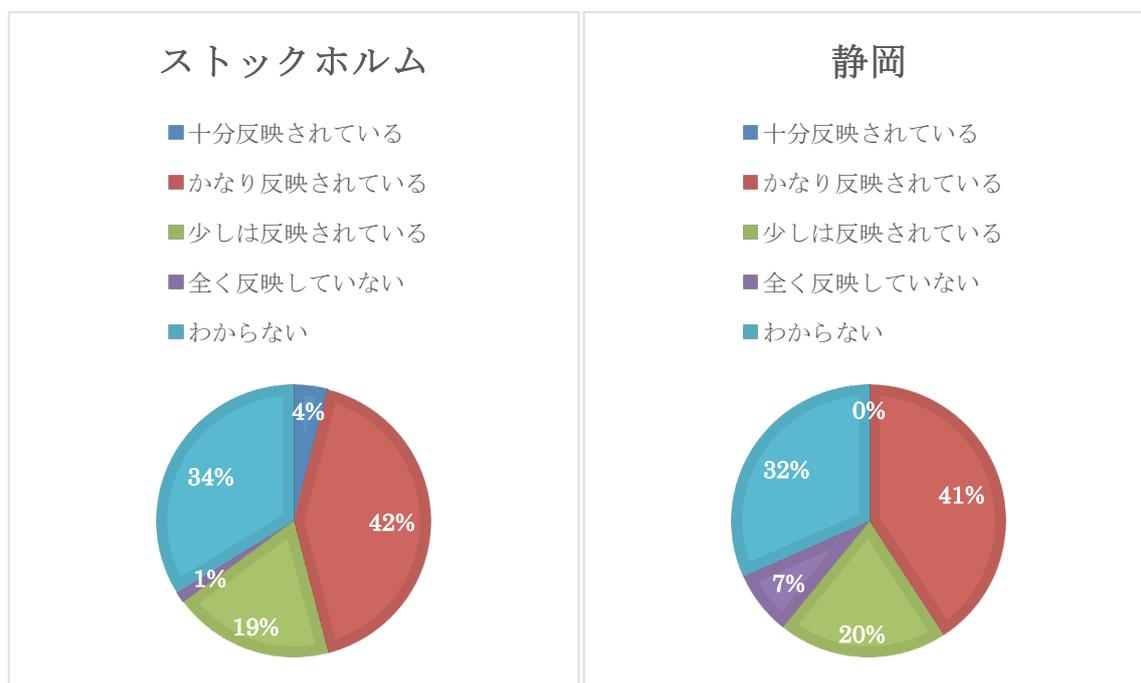


(3) スウェーデン、静岡での回答の比較

(ア) 一般大衆の期待を含む意見が国の政治にどの程度反映されていると思いますか？

| ストックホルム | 十分反映されている | かなり反映されている | 少しは反映されている | 全く反映していない | わからない |
|---------|-----------|------------|------------|-----------|-------|
| 全体 | 3 | 31 | 14 | 1 | 25 |
| 20歳以上 | 1 | 12 | 5 | 0 | 5 |
| 10代 | 2 | 19 | 9 | 1 | 20 |

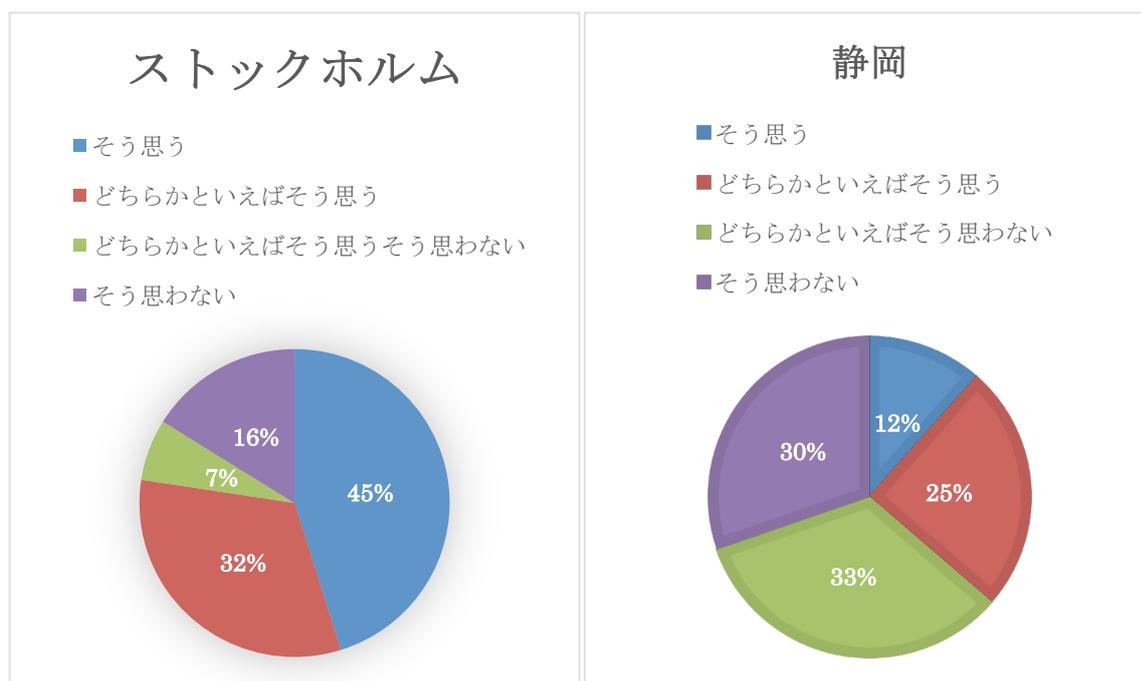
| 静岡 | 十分反映されている | かなり反映されている | 少しは反映されている | 全く反映していない | わからない |
|-------|-----------|------------|------------|-----------|-------|
| 全体 | 0 | 49 | 24 | 9 | 38 |
| 20歳以上 | 0 | 22 | 14 | 3 | 8 |
| 10代 | 0 | 27 | 10 | 6 | 30 |



(イ) 社会は自分の力で変えられると思いますか？

| ストックホルム | そう思う | どちらかといえば そう思う | どちらかといえば そう思わない | そう思わない |
|---------|------|------------------|--------------------|--------|
| 全体 | 42 | 30 | 6 | 15 |
| 20歳以上 | 11 | 12 | 1 | 5 |
| 10代 | 31 | 18 | 5 | 10 |

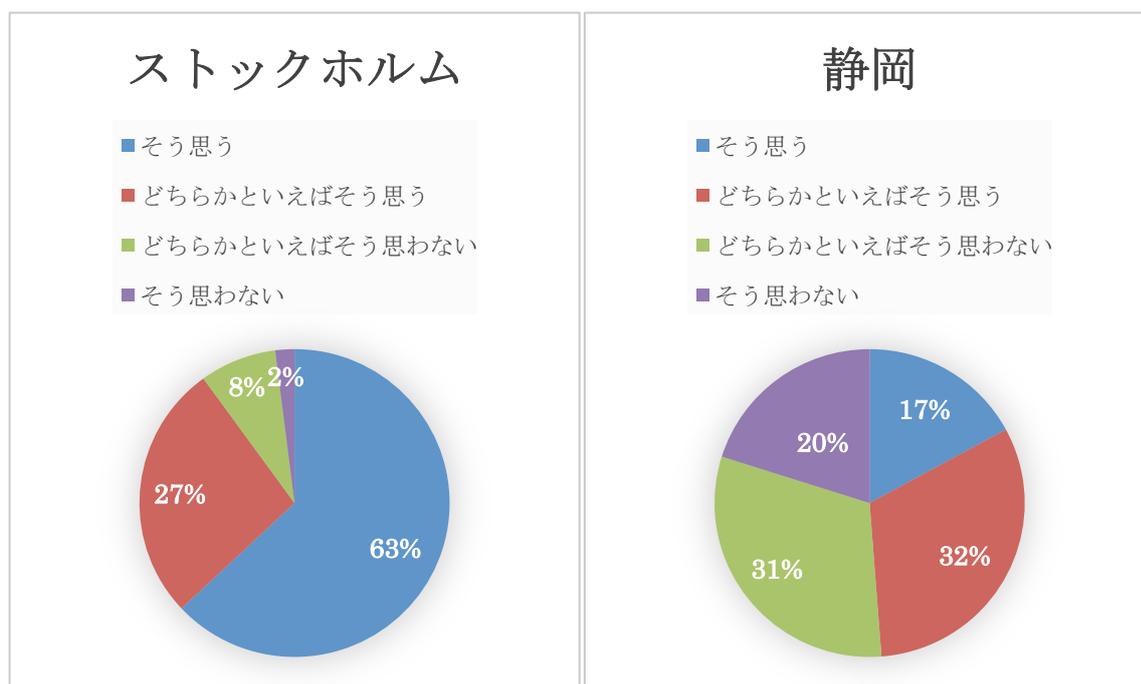
| 静岡 | そう思う | どちらかといえば そう思う | どちらかといえば そう思わない | そう思わない |
|-------|------|------------------|--------------------|--------|
| 全体 | 19 | 41 | 55 | 50 |
| 20歳以上 | 5 | 12 | 21 | 12 |
| 10代 | 14 | 29 | 34 | 38 |



(ウ) あなたは自分のことが価値のある人間だと思いますか？

| ストックホルム | そう思う | どちらかといえばそう思う | どちらかといえばそう思わない | そう思わない |
|---------|------|--------------|----------------|--------|
| 全体 | 63 | 27 | 8 | 2 |
| 20歳以上 | 19 | 11 | 4 | 1 |
| 10代 | 44 | 16 | 4 | 1 |

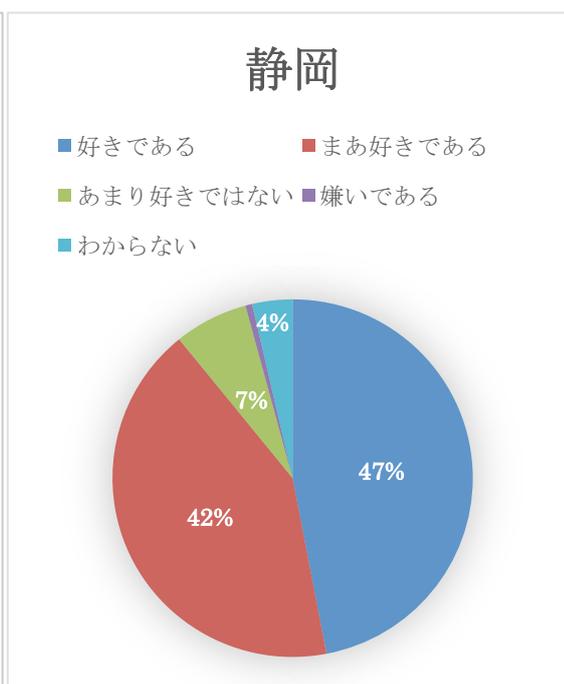
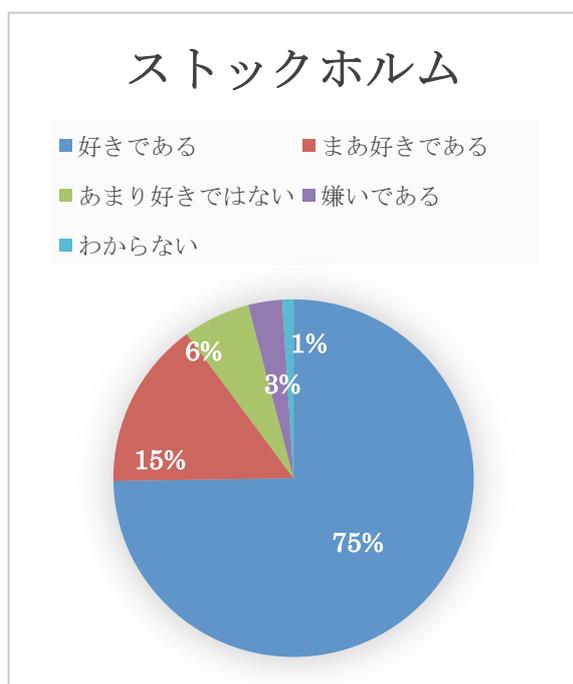
| 静岡 | そう思う | どちらかといえばそう思う | どちらかといえばそう思わない | そう思わない |
|-------|------|--------------|----------------|--------|
| 全体 | 28 | 52 | 51 | 33 |
| 20歳以上 | 8 | 17 | 16 | 8 |
| 10代 | 20 | 35 | 35 | 25 |



(エ) あなたは、自分の住んでいる町（市町村）が好きですか？

| ストックホルム | 好きである | まあ好きである | あまり好きではない | 嫌いである | わからない |
|---------|-------|---------|-----------|-------|-------|
| 全体 | 74 | 15 | 6 | 3 | 1 |
| 20歳以上 | 27 | 5 | 2 | 1 | 0 |
| 10代 | 47 | 10 | 4 | 2 | 1 |

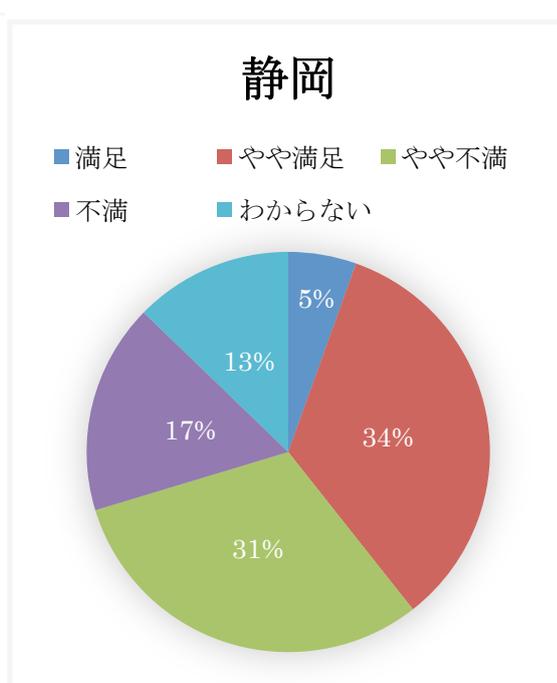
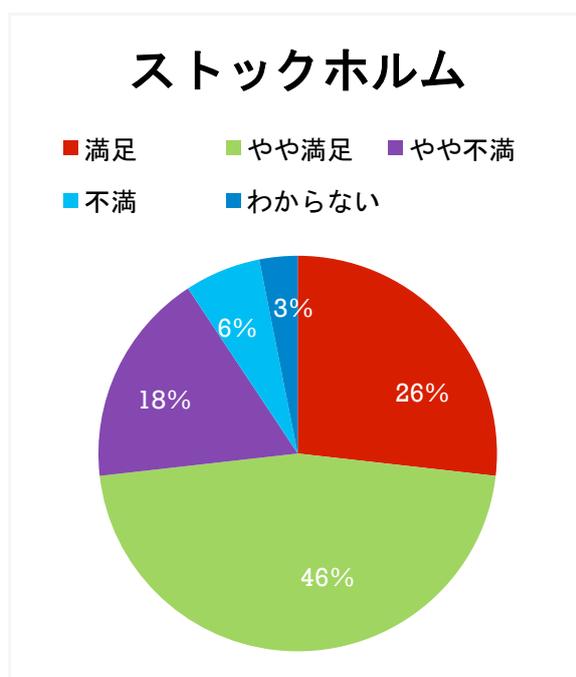
| 静岡 | 好きである | まあ好きである | あまり好きではない | 嫌いである | わからない |
|-------|-------|---------|-----------|-------|-------|
| 全体 | 78 | 70 | 11 | 1 | 6 |
| 20歳以上 | 23 | 21 | 4 | 0 | 2 |
| 10代 | 55 | 49 | 7 | 1 | 4 |



(オ) あなたは自国の社会に満足していますか？

| ストックホルム | 満足 | やや満足 | やや不満 | 不満 | わからない |
|---------|----|------|------|----|-------|
| 全体 | 26 | 45 | 17 | 6 | 3 |
| 20歳以上 | 7 | 17 | 8 | 1 | 0 |
| 10代 | 19 | 28 | 9 | 5 | 3 |

| 静岡 | 満足 | やや満足 | やや不満 | 不満 | わからない |
|-------|----|------|------|----|-------|
| 全体 | 9 | 56 | 51 | 28 | 21 |
| 20歳以上 | 4 | 17 | 17 | 10 | 1 |
| 10代 | 5 | 39 | 34 | 18 | 20 |



(カ) 自分自身の人生に対して自分の思う通りになると思いますか？

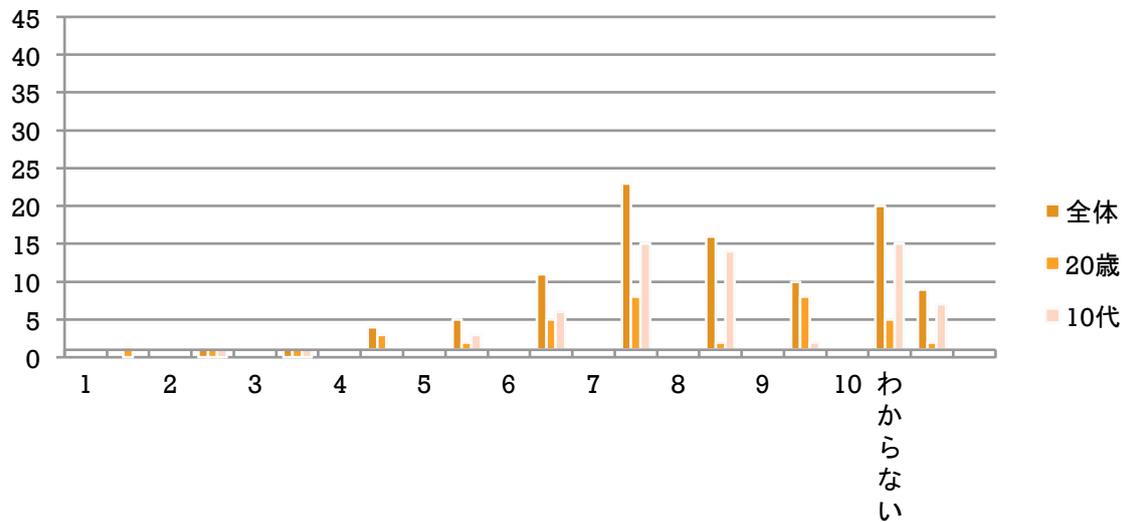
思わない

そう思う

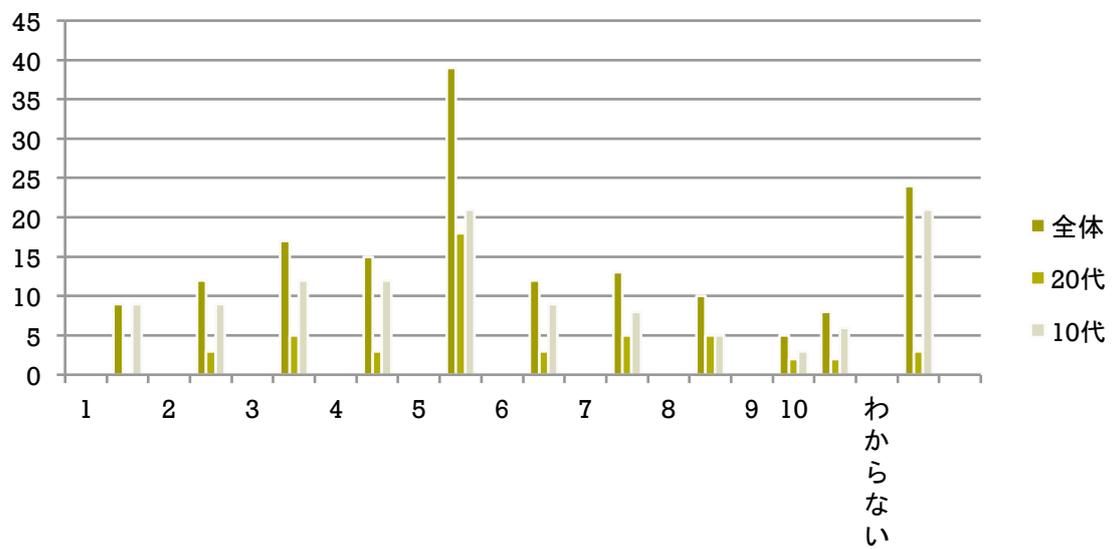
| 静岡 | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | わからない |
|-----------|---|----|----|----|----|----|----|----|---|----|-------|
| 全体 | 9 | 12 | 17 | 15 | 39 | 12 | 13 | 10 | 5 | 8 | 24 |
| 20歳以上 | 0 | 3 | 5 | 3 | 18 | 3 | 5 | 5 | 2 | 2 | 3 |
| 10代 | 9 | 9 | 12 | 12 | 21 | 9 | 8 | 5 | 3 | 6 | 21 |

| ストックホルム | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | わからない |
|----------------|---|---|---|---|---|----|----|----|----|----|-------|
| 全体 | 1 | 0 | 0 | 4 | 5 | 11 | 23 | 16 | 10 | 20 | 9 |
| 20歳以上 | 0 | 0 | 0 | 3 | 2 | 5 | 8 | 2 | 8 | 5 | 2 |
| 10代 | 1 | 0 | 0 | 1 | 3 | 6 | 15 | 14 | 2 | 15 | 7 |

ストックホルム



静岡



第3章 地域における若者参画

1. ユースセンターとは

(1) ユースセンターとは

ユースセンターとは若者向けの余暇活動支援施設であり、すべての若者に開かれている。スウェーデンでは、おおよそ中学校区にひとつのユースセンターが設置されている。日本の児童館とは異なり、若者が施設の運営などを担い、参画が重視されているのが特徴である。センターによって対象年齢は異なるが、中高生世代（13歳～18歳）を主なターゲットとしているものが多い。

ユースセンターには、ユースワーカーと呼ばれる若者と関わる専門職員が存在し、若者の主体性を促し、余暇活動の支援を行っている。センターによって異なるが、センター内で若者たちは、対話、スポーツ、テレビゲーム、ダンス・バンドなどの音楽活動、工作、社会活動など、様々な活動を自らの意思で行うことができる。

本報告書では、スウェーデン最大級のユースセンターである Fryshuset（フリースフューセット）をはじめ、スウェーデンで最も歴史ある Birka Garden（ビルカガーデン）など、訪問したユースセンターを紹介する。

2. FRYSHUSET（フリースフューセット）

(1) 施設概要

フリースフューセットはスウェーデン最大規模のユースセンターで、学校とユースセンターの両方の機能を兼ね備えた施設である。1984年に設立され、規模は2万4千平方メートルである。約550人の有給の職員と1000人のボランティアが働いている。バスケットボール利用者が年間1万人以上、スケートボードで3千人以上の若者がこのセンターで活動しており、この数から多くの若者がフリースフューセットを利用していることがわかる。

【Fryshuset の外観】



代表の故アンダース・カールバーグは、1968年の学生運動の闘士であった。設立当初の代表の本業は建設業で、YMCA4というバスケットボールチームのコーチをしていた。当時使われていなかった冷凍倉庫を使用して活動を始めたことが、この施設の名前の由来にあたる¹。当時のスウェーデンの学校や社会では、生徒の知識だけを育むことだけに専念しており、若

¹ スウェーデン語で冷蔵庫の意味。もともと古い冷蔵庫を再利用して Fryshuset がつくられたのが由来

² 小学生世代が放課後に利用する施設で、ユースセンターよりも若い世代が利用する

者や生徒の好奇心を育むことをあまり重要視していなかった。またユースクラブ²がない中等学校のために、「往來の学校よりももっと魅力的な学校にしよう」ということで、スポーツや音楽等の余暇活動を組み込んだ学校をフリースヒューセットに設立した。

その後、1986年夏にストックホルムで巻き起こった移民による暴動³をきっかけにして若者の声を聞き、社会問題解決アプローチをするソーシャルプロジェクトが生まれた。活動を通じて明らかとなったのは、ほとんどの若者が暴力を遺憾に感じていることだ。そして、それを打ち消す方法や、どうやってより良い将来を築いていくのかの多くのアイデアを若者が持っていた。その事件をきっかけに、フリースヒューセットは学校・余暇活動だけでなく、若者の生きている社会の中にある課題解決の活動を行うようになっていった。フリースヒューセットが大きくなっていったのは、ただ社会に必要とされていたからである。フリースヒューセットが大切にしている4つの価値観がある。1つ目は多くの人は問題にしか目を向けないが、私たちは可能性に目を向け、誰もが必ず成功できると強く信じること。2つ目は最初から「今を担う若者」を巻き込み、話し、考え、活動する。3つ目に大事にしている価値観はたとえ過去に悪いことをしていたとしてもこれからどうしていくか未来に目を向けること。四つ目の価値観は、多様性とそれを尊重することで、社会的、経済的、文化的に様々な背景があり、いろいろな人が来ているからお互いを受け入れ、多様性を共有する中でそれが創造性につながる。

(2) 活動について

フリースヒューセットは（ア）教育、（イ）パッションート・インタレスト（情熱的な興味）、（ウ）労働市場への参加プログラム、（エ）ソーシャルワークの4つの分野を担っている。

（ア）教育

フリースヒューセットは中学校、ギムナジウム（高校）、ホルクホイスコーレの3つの学校を経営している。

² 小学生世代が放課後に利用する施設で、ユースセンターよりも若い世代が利用する

³ 1986年5月13日に Husby 地区で発生した警官による射殺事件をきっかけに、若者が車に火炎瓶を投げ込み、地域の学校や保育所に投石や放火をした暴動 <http://blogs.com/article/73407/>

中学校

13歳から15歳を対象としており、およそ150人の生徒が通っている。「パッションネート・インタレスト（情熱的な興味）」という教科があり、バスケットボールやスケートボード、音楽活動など、生徒達の興味からやりたいことを自由に決めるのが、この教科の特徴である。詳しくは後述する。

ギムナジウム（高校）

16歳から18歳を対象としており、200人程の生徒がいる。中学校と同じくパッションネート・インタレストの授業があり、バスケットボールをはじめ、コンピューターゲームのプログラミングをやるなど、中学校よりも少し水準の高い内容を行っている。

ホルクホイスコーレ（市民高等学校）

18歳以上であれば誰でも入学可能で、仕事のための資格が取れる。この学校はスカウトのスウェーデン支部とYMCAとが共同で運営している。スカウトは、日本でいう「ボーイスカウト」と同義である。スカウトは、「青少年が個人として、責任ある市民として、地域、国、国際社会の一員として自らの肉体的、知的、情緒的、社会的、精神的可能性を十分に達成できるように青少年の発達に貢献すること」を目的として、世界中で活動している。YMCAはYoung Men's Christian Association（キリスト教青年会）の略で、キリスト教主義に立ち、教育・スポーツ・福祉・文化などの分野の事業を展開する非営利公益団体である。

（イ）パッションネート・インタレスト（情熱的な興味）

パッションネート・インタレストは、フリースヒューセットの各学校の教科のひとつにもなっている、余暇活動のような開かれた活動である。この活動はフリースヒューセットの中でも最大規模のもので、体育館、スケートボードパーク、レコーディングスタジオ、ステージ、クラブ、DJスタジオ、シアター、食堂などの施設が完備され、活動が行われている。遊びのような余暇活動は、若者の学びを育む有効なツールだと考えられている。また、性別や人種などの多様な若者たちが混合で活動を行っており、その活動の中で、人権、平等を学んだり、スウェーデン語が学べたりするようにデザインされている。ほかにも、若者が社会企業家となるため育成や研修を行うものも存在する。このパッションネート・インタレストが取り入れられたきっかけは、子どもの時のように好奇心旺盛であることが、なくならないような仕組みを作り、魅力的な学校にしたいという思いからである。反対意見もあるが、学校を魅力的なものにして楽しんでもらい、勉強のモチベーションを高め、それが学校に来るきっかけになればよいという考えだ。国のカリキュラムには従い、その上で出来る限り個々の若者のニーズに合うようにし、彼らの声を取り入れるようにしている。

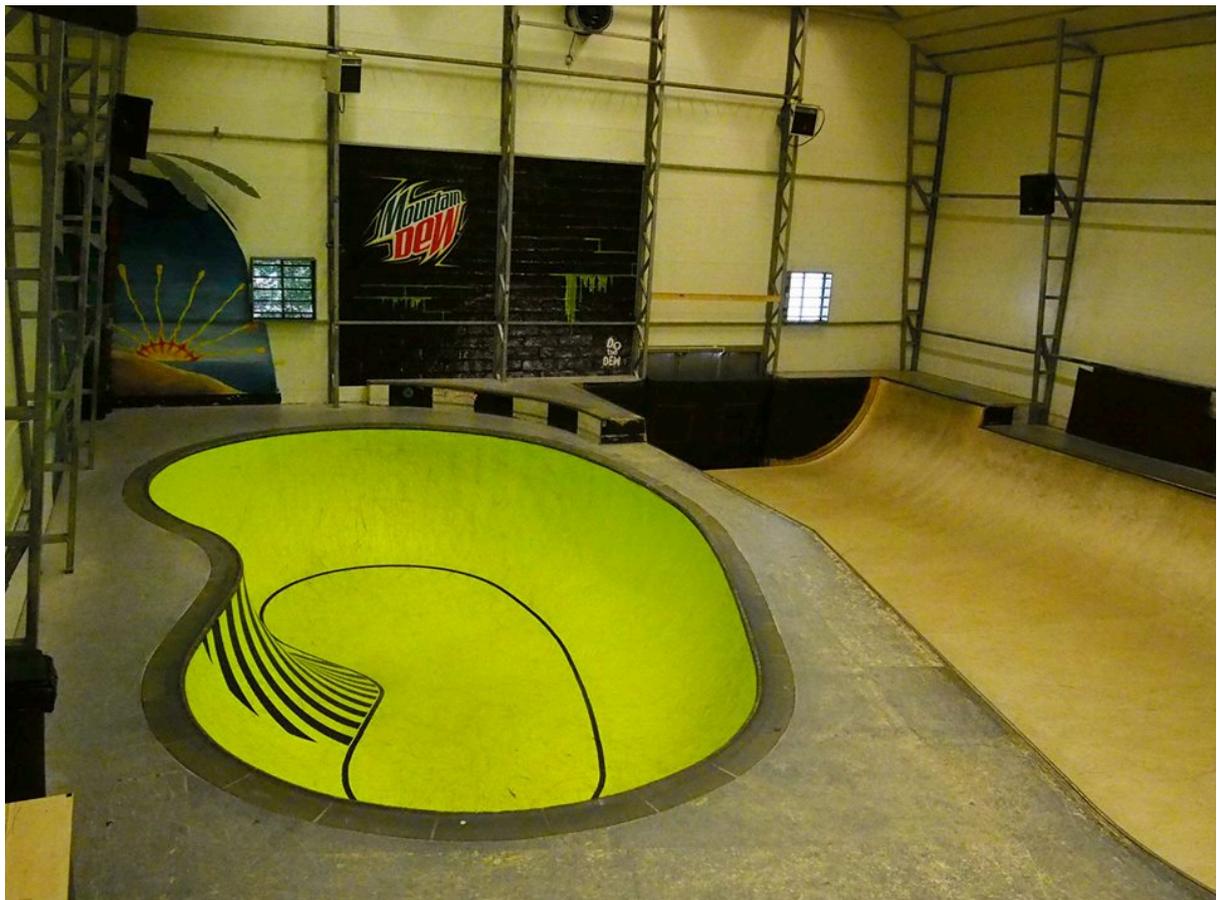
(ウ) 労働市場へのプログラム

非雇用状態にある若者が仕事をするための、サポートをするプログラムを行っている。

(エ) ソーシャルワーク

20種類以上の多様な社会的プロジェクトを展開している。ターゲットを絞ったアプローチを行っているのが特徴である。それぞれのプロジェクトには必ず専門の資格を有している職員がおり、その中には、過去につらい経験をしたワーカーが多く、そういった状況にある若者の気持ちに共感することができる。活動資金も各プロジェクトそれぞれで助成金を取っているのが特徴である。具体的には、多様なソーシャルワークのひとつに、ネオナチをはじめとする国家主義的な活動やグループを抜け出すために支援する、EXIT（イグジット）というプロジェクトがある。

【Fryshuset のキックボード場】



【Fryshuset の施設内の体育館】



【Fryshuset ヒアリング時の様子】



3. BIRKAGARDEN(ビルカガーデン)

(1) 施設概要

ビルカガーデンは1912年に貧困者に住居を提供するセツルメント⁴のひとつとして設立された。設立された地区周辺には工場がたくさんあり労働者が多かったため、その労働者の子供達を預かることを目的に幼稚園も設備されていた。また、若者に対する活動を設立当初から行っていた。ビルカガーデンの目的は主に2つある。1つ目は社会的・文化的な活動を社会に提供することである。2つ目はビルカガーデンが” 出会いの場” (meeting place) となることである。様々な背景をもった全ての人に平等に出会いの場を提供することで、訪れた人が会話を通じてお互いに「人生の経験の場」となるようにしている。

(2) ビルカガーデンの歩み

| | |
|--------|--|
| 1912年 | ビルカガーデン設立（幼稚園、図書館、レクチャーの場、勉強会の場を提供） |
| 1920年代 | 大きな厨房を設備 |
| 1930年代 | 市民大学設立 （高校を卒業したものなら誰でも通え、職業に必要なスキルを身につけることができる大学） |
| 1940年代 | 若者キャンプ開始 |
| 1950年代 | ギター講座開始 |
| 1960年代 | ソーシャルギャザリング開始 |
| 1970年代 | 世代を超えた対話の会場設備 |
| 1980年代 | ストックホルム市の高速道路汚染問題に対して10代の若者たちがデモ活動 |
| 1990年代 | ユースカフェ設備 |
| 2000年代 | おとぎ話のワークショップ（コスチューム、おとぎの部屋） |

⁴ 貧しい住宅に住む地区に宿泊所・診療所・託児所などを設け、住民の生活向上のために助力する社会事業。また、その施設。

(3) 施設について

60人のスタッフがいる。ビルカガーデンはビルカガーデン財団と民間会社が所有する形態をとっている。予算は年間35億 skr⁵（約5億円）をたてている。この予算の中には、国からの補助金、財団が確保したお金、民間会社がこの施設を貸し出した時に生じる貸出料が含まれている。

(4) 設備

- ・カフェ：基本的に毎日営業している。（月～木曜日：6時～22時、金曜日：6時～18時）
月・水・木曜日はスープを提供。市民大学や退職者の人たちにとっての出会いの場になるようにしている。

【カフェのカウンター】



【カフェ内のスペース】



⁵ sek（クローナ）：スウェーデン通貨 1 sek=約14円（2015年11月11日15時の時点）

- ・ コンピュータールーム
- ・ 図工室：日本の小学校よりも工具が充実
- ・ バンドのためのリハーサルスペース・スタジオ
- ・ ビリヤード
- ・ 卓球

(5) 活動内容

(ア) 幼稚園

国籍や生活環境に関わらず異なる考えを尊重し、すべての家族に幼稚園を提供している。子供たちが自立心を高めること、自らの経験をもとにものごとを選択する力を身につけること、自分のとった行動に対して責任をとる力を身につけること、民主主義的な考えを養うことを目的とした教育をしている。

(イ) おとぎ話のワークショップ

幼稚園の子供たちが妖精になれるワークショップ。2009年から開始している。

【スウェーデンで有名な絵本作家が描いている妖精をモデルにして作られたコスチューム】



【おとぎ部屋の内装】



（ウ） 放課後児童クラブ

10歳～12歳の子供たち向け。1日に約60～80人の子供たちが遊んでいる。施設側は子供たちを魅了するようなレジャーを提供し、参加したいと思えるような施設になるように努力している。学校とは異なる場に身を置くこと、様々な活動を自分自身で選択すること、近隣の学校の新しい友達をつくるのが学校以外の場でレジャーをすることの必要性だと考えている。

（エ） 青年活動

若者が主体となって自分たちがやりたい活動を行えるようサポートをする。ビルカガーデンと他のユースセンターとの違いはプロジェクト支援型のユースワークを行っていることである。プロジェクトは若者たちがワーカーに自主的に「こういうことがやりたい！」という連絡をしてくるところから始まる。若者たちはFacebookやTwitterから気軽に連絡がとれる。

実際の青年活動のプロジェクトの例として3つあげる。

“LAN” プロジェクト

”lan”プロジェクトとは、24時間コンピューターゲームをするというもの。これは5人の子供たちが提案した。このプロジェクトの良い点は、同じ場所で同じ時間を共有することで、新しい出会いがあるところである。スウェーデンでは、”lan”プロジェクトのようなイベントが各地で開かれるがお金がかかるため子供ではなかなか参加できない。そこで、このようなプロジェクトが企画された。

RYKTET (噂)

お酒・薬を禁止して、健全にかつ新しい出会いの場となる「若者のためのナイトクラブ」をいろいろな場所で開こうというものである。15~20人の若者たち(14~18歳)が提案した。プロジェクト名は噂のように広がってほしいという思いが込められている。有名なラッパーを招いたが、その手配や、企画の資金調達は全て若者たちが行っている。

ホームレス支援プロジェクト

ルーマニアのホームレスの人たちを助けるというものである。実際にルーマニアを訪れ、彼らのことをより知った。政治家やメディアに訴えかけるようなこともしている。ルーマニア現地の若者たちとも共に活動している。

ビルカガーデンでは、プロジェクトの支援のために、ファンドレイザー(資金調達する人)を雇っている。その人が民間や公共の資金、政府の補助金を探してくる。そこから若者が選び出して自分たちで交渉する。例えば、ナイトクラブの場合、スポンサー企業からジュースを提供してもらう代わりに、自分たちがそのジュースをインスタグラムに投稿することで等価交換している。企業は協力的にスポンサーになってくれる。

(オ) 施設の貸し出し

施設の貸し出しを行う。多様な人に貸し出しを行うことで、プラットフォームになることを重要視している。

(カ) サマーキャンプ

1927年からストックホルムから100km北にあるノルタリアで毎年、夏を5つの期間に分けて計5回行っている。245人の子供が参加していて、15人のリーダー(ユースワーカー)がいる。キャンプの内容はユースワーカーが考えているが、よりよいものを提供するために専門家の知識を参考にし、子供の意見も考慮にいれている。ストックホルム市のホームページにサマーキャンプのサイトに載せてもらっており、若者たちが自由に探せるようにしている。

(キ) 講座

セラミック、ペイント、ダンス、音楽、ヨガなど様々な講座が開かれている。子供から大人まで幅広い年齢の人が講座に参加することが出来る。

【センター内の部屋】



▲工作室



▲図工室



▲センターを利用する子供の作品

(6) ユースワーカーの紹介

8年前からビルカガーデンで働いていて、4年前からユースワークに関わっている。放課後児童クラブとユースワークとキャンプの3つの活動を主にしている。放課後児童クラブで関わっていた子どもたちが成長してユースワークを通じて関わりをもつことができるので、その成長をみることで嬉しく思っている。



オスカルさん

【Birka Garden ヒアリング時の様子】



4. KFUM JÖNKÖPING

(1) 概要

KFUM はスウェーデン語で YMCA のことである。KFUM の若者に焦点を当てた活動は 1945 年から始まっている。このユースセンターは 2004 年に設立したものであり、世界最大規模の組織である YMCA が管轄している。YMCA ヨンショーピングは 1855 年に設立した。KFUM は『私達の活動が若者の能力や可能性を証明している。施設の主人公である若者のために安全な場所を提供し、若者に挑戦する機会を与えることで若者の未来への橋渡しをする』というビジョンを掲げ、若者に人生の意義について教える活動をしている。また、スウェーデンの人々が孤独を感じていることが問題になっている。そこで KFUM ではスウェーデンにいる人々がこの施設では孤独ではなく愛を感じられるような活動をすることを目標にしている。

【KFUM Jönköping の外観】



(2) YMCA⁶とは

YMCA は 1844 年に路上の人々の社会的ニーズ（社会的不平等、過激な労働条件、貧困、スラム街などの問題の解決）に応えるためにロンドンで活動を始めた組織である。

⁶ <http://www.ymca.int>

世界最大規模のキリスト教の組織になっている。その規模の大きさを活かして、政府に圧力をかけることができ、社会の発展に努めている。今日のようにYMCAが若者に焦点を当て始めたのは1960年代であった。YMCAは「奨励」（奨励することは個性を変化、強調し、人間関係を強くする）、「信頼」（何があっても若者を信頼する、若者の良さを引き出すために動く）、「責任」（責任を持つことで自尊心が生まれ、心の中の強さを引き出す）「明白さ」（新しいことや分からないことに恐れず、常に学びや改善をしていく）という4つの価値観を掲げ、【スペース】（活動の空間を提供する）、【トランスフォーメーション】（若者に変化をもたらす）、【インパクト】（社会に影響を与える1人になる）という3つの理念をもとに活動をしている。

（3） 施設の詳細

KFUMはVIDABLICKという場所で主にチームビルディングのために活動している。21時まで施設は営業をしている。若者が施設を利用するのは15時前後から夕方にかけてが最も多い。そのため、施設を日中など若者があまり活動しない時間帯は学校の授業や、運動施設を必要としている団体のために貸し出しをしている。毎日代替で約500人～700人の若者（13歳～18歳）がこの施設を利用している。設備は、体育館やスケートボードエリア、ジム、バンドをできる部屋が16室あり、レストラン、カフェ、クライミングなども備わっている。また、施設の経営は主に政府からの補助金、国や企業などのスポンサー、利用者からの会費（20歳以下 975ske、20歳以上 1250ske）などで成り立っている。KFUMには金銭的な余裕のない若者のためのフリースペースが備えられている。このスペースは基本的に無料で利用することができ、すべての活動が利用できるわけではないが、サッカーや卓球、ビリヤード、テレビゲームなどを利用することができる。

図表1 KFUMの会費

| | |
|------------------------|----------------------|
| 会費や企業スポンサー、国からの支援金、貸出料 | 14,285,714 Sek（役2億円） |
| 会費（20歳以下） | 975 Sek（約1万3000円） |
| 会費（20歳以上） | 1250 Sek（1万7000円） |

出所：ヒアリングをもとに筆者作成

（4） 活動内容

KFUMの活動は若者のスポーツトッププレイヤーの育成ではなく、若者が生きていくうえで必要なことや社会にインパクト与えるために必要なことを伝えている。この施設では主にスポーツを行っているがその他さまざまな活動をしている。

- ダンス 毎週 150 人が活動をしている
- パルクール メンバー180 人
- フロアボール メンバー200 人
- フットサル 小学生→高校生まで 5 チーム移民向けのチームもある
- バレーボール メンバー100 人
- 体操 3 歳～6 歳
- その他にスケートボード、BMX、キックボード、レストラン、カフェ、ジム、卓球、クライミング、ペイントボール

【施設内の様子】



(5) その他のプログラム

(ア) YMCA に基づく国際的な活動

タイやフィリピンでスポーツを通してのこども支援。現在 500～600 人のプログラムになっている。

(イ) 60 歳以上の方向けの施設の開放

若者と同じように、施設を利用することができる。若者と 60 歳以上の高齢者の交流もしていきたいと考えているが、まだできていない。

【KFUM Jönköping ヒアリング時の様子】



5. 穏健党青年部ヨンショーピング県支部

(1) 穏健党 (MODERATERNA)⁷⁾について

スウェーデンの保守政党で、1904年に設立した。2006年9月の選挙を前に、穏健統一党 (Moderaterna Samlingspartiet) から名前を変更した。減税を党の公約に掲げ、サッチャリズム的な保守自由主義の色合いが強い政党で、現在は最大野党である。主な政策としては、ユーロ導入に賛成、EU加盟に賛成、NATO加盟に賛成、ODAの削減を主張している。全国の穏健党の会員は50,000人、青年部には30,000人のメンバーがいる。

(2) ヨンショーピング県 (JÖNKÖPINGS LÄN)⁸⁾の概要

ヨンショーピングランスタングは、スウェーデン南部に位置する。県庁所在地はヨンショーピング市 (Jönköping) で、面積は1万495km²、人口は約33万人である。スウェーデンで2番目に大きいヴェッテルン湖の南に位置している。ヨンショーピングの中には13のコミ

図表2 ヨンショーピング県の地図



出所：Wikipediaより画像引用し、筆者作成

⁷⁾ <http://www.moderat.se>

⁸⁾ <http://www.lansstyrelsen.se/jonkoping/index.html>

ューンがあり、首都であるヨンショーピングコミュニティは湖の最南端に位置している。ヨンショーピング市の人口は約 13 万である。ヨンショーピング県には国レベルの議会の議席が 13 あり、穏健党は 3 議席を持っている。

(3) 穏健党青年部ヨンショーピング支部について

(ア) 概要と基本的な活動

ヨンショーピングの穏健党のメンバーは 2,500 人、青年部で 350 人の会員がいる。青年部の年齢制限は 12 歳から 30 歳で、全体をまとめる本部の他に大学生部と、小学生から高校生の部の 2 つに分かれている。青年部会員は 40skr (約 560 円)、穏健党会員は 150skr (約 2100 円) の年会費がそれぞれかかる。

基本的な活動はフィーカ⁹をしながら、政治的な対話をするることである。日常レベルの話から、ヨンショーピングの政治に関する話、国レベルの話まで様々なことを話す。話をしたことは、毎年実施される、地域レベル、国レベルの青年部の党大会で意見表明をしている。地域レベルの党大会は誰でも参加できるが、国レベルの党大会は法律上全国で 100 人のみしか

【穏健党青年部 ヨンショーピング支部 ヒアリング時の様子】



⁹ スウェーデン語で、甘いものと一緒にコーヒーなどを飲むことを指す。コーヒーブレイクなどと似た意味

参加できないことになっている。実際にヨンショーピングの隣のハラン市の青年部が、生徒には学校を選ぶ権利があることを主張し、学校選択制の導入を党大会で提案した。これは穏健党の政策となり、その後 1991 年に採択され、法律化された。

また、会員を増やすために学校へキャンペーンに訪れることもある。こうした学校でのキャンペーンは、学校長の許可があれば行うことができる。穏健党青年部ヨンショーピング支部では、月に 1 回程度学校を訪れているが、今までに断られた経験はないという。

(イ) 選挙中の活動

選挙中は学校から招かれ、ディベートに参加する。一般的に選挙中に学校内で行われるディベートには、スウェーデン議会に議席を持つ 8 つの政党¹⁰のすべてが参加する。ディベートでは穏健党青年部の主張を伝え、それは母体である穏健党と必ずしも同じではない。

【支部の事務所内に YEC のサインを残した】



¹⁰ スウェーデン議会に政党を持つ政党は、議席順に、スウェーデン社会民主労働党、穏健党、緑の党、自由民主党、中央党、民主党、キリスト教民主党、左翼党である

(ウ) ヒアリングを行った際に同席していた穏健党青年部のメンバー¹¹



(写真の左から)

ファニー (20 歳、大学生、青年部の前代表)

ソフィア (23 歳、大学でメディアコミュニケーションを勉強している)

エミリー (21 歳、一般企業で働いている。LGBT の団体でも活動している)

ストリス (ヨンショーピングの議席から出ている穏健党の国会議員)

ヨナス (22 歳、ヨンショーピング県の穏健党青年部の代表。ヨンショーピング市の政治家)

ミル (20 歳、大学で小学校の先生になるために勉強している)

オロ (15 歳、ヨンショーピング市の穏健党青年部の代表)

アントン (20 歳、ヨンショーピング県の穏健党青年部の副代表。ヨンショーピング市の政治家)

¹¹ <http://www.mufjonkopinglan.se>

第4章 全国的な若者組織・若者支援組織

1. LSU 全国青年協議会 (NATIONAL COUNCIL OF SWEDISH YOUTH ORGANIZATIONS)

(1) 概要

LSU¹²はスウェーデンの非営利若者団体のコーディネート団体である。独立した非政府組織であり、資金は政府から受けているが、LSUでの意思決定は完全に政府から独立している。加盟団体はスウェーデンの若者団体で政治、学生運動、宗教、環境などの活動をしている団体や、赤十字、文化活動団体、科学活動団体、アウトドア団体など様々で、84の団体で構成されているアンブレラ組織である。LSUは若者団体の状況の改善と共に若者の声を政府に届ける役割を担っている。社会で多くの経験を積んできた大人に対し、経験や知識で劣る若者は自分の意見を社会に届ける場が少ない。そこで、LSUによって若者の意見が政治の場に反映される仕組みがつくられている。

(2) 加盟団体との関係

LSUは1940年代にスウェーデン国王によって創設された。当時は第二次世界大戦中で、難民や戦傷者を助けようとするキャンペーンの際にスウェーデン国内の若者団体が集まったことで、加盟団体が増加した。創設当初は国際開発の分野に携わっており、国際開発を国連などと協力して行っていた。その後1990年代にはスウェーデン国内にも目を向けるようになった。その創設当初からのつながりがLSUとして今も続いている。加盟団体との関係を維持するために、LSUは組織を民主的にし、透明性を保つことで加盟組織からの信頼を得ている。例えば、アドボカシー¹³をする際も経験や感情ではなく知識に基づいたアドボカシーを行っている。つまり、調査をきちんと行い、統計を取るなどしてレポートを作成し、そのレポートを広げることで信頼を得ている。

¹² <http://lsu.se/english/>

¹³ 「支持」「唱道」などの意味を持つ言葉。日本では「政策提言」などの意味で用いられることが多い。

(3) 活動の目的と内容

LSUの活動の目的はスウェーデン国内及び国際レベルにおいて若者団体の状況を改善することであり、活動内容は主に3つある。

1つ目は、政策形成に携わることであり、民主主義や若者分野の政策立案である。また、各団体が政府に対してロビイング¹⁴する際のサポートを行っている。

2つ目は、加盟団体のサポートをしており、セミナーやリーダーシップの講座、若者政策（住居政策、高等教育や労働市場など多岐に渡る）について政治家を呼んで若者たちの声を届けることである。

3つ目にスウェーデンの若者団体だけではなく、世界的規模での活動をミッションとしていて、レバノン、ベラルーシなどの若者団体と連携している。国際的な活動では、COP21¹⁵などの国際イベントにスウェーデン代表に加えてLSUも参加している。また、資質形成をするトレーニングを行っている、平等や多様性、組織開発、アドボカシーなどの強みを生かしている。

(4) 若者政策の形成支援

LSUで若者政策に関わっていることは2つある。1つは、全国の各団体の要望をそれぞれの団体に募って、若者政策報告書を作成し、政府に提出する。例えば、学校では生徒会などに報告書を作成してもらい、それを政府の政策に反映してもらう。もう1つはコミューン、自治体レベルの若者政策作りである。調査してみたところ、半分の自治体しか若者政策をもっていないことが分かった。そこでLSUのメンバーを各地に送って若者政策を立案する支援をしている。

(5) 政治との繋がり

LSUは政治家と会い、話をすることで若者団体の状況改善に努めている。また、加盟団体が政治家と会う場を設けることもしている。LSU自身も会っているが、専門的な話になったら加盟団体に対して直接政治家に会うように勧めている。

スウェーデンでは、リフォロールシステムというものがあり、新しい法律が出来ると、市民団体にも評価してもらう。まず政府が法律案を作り、それを各分野の団体に送る。政府で

¹⁴ 政策決定に影響を与えようとする活動

¹⁵ COP21＝気候変動枠組み条約第21回締約国会議

は分野ごとに団体をリストアップしていて、そのリストに基づいて法律案を各団体に送っている。政府の送付先リストに漏れがある場合はLSUがリストに追加するよう求めている。各団体はその分野の専門家として意見を求められている。また、LSUも二か月の間に自分たちで盛り込みたいことを話して、政府にフィードバックを返している。

(6) LSUの政治的中立性

LSUは政治的中立性を保つために次のことをしている。第1に、すべての政治団体がLSUに加盟していることが挙げられる。加盟団体によって意見は違うことは当然である。例えば、各政党によって細かいレベルで政策が違うので、LSUは細かい所までは深入りせず、民主主義や若者政策などのメインフィールドのみ考慮に入れて、若者団体に接している。第2に、政府はLSUにクリティカルな存在になって欲しいと考えているため、政府から資金を受けてはいるが、常に従う必要はなく、政府と意見が違って資金が減ることはないのである。さらに、加盟団体が抜けないようにすることも大事であり、そのためには平穩にしていける必要があり、特定の団体に肩入れしないようにする必要がある。

(7) 日本で若者組織の連合を作る際のアドバイス

個々の若者の声を聴くより、全国にある若者団体から代表となる団体を見つけ、その代表から声を聴くことが大切である。それはつまり、代表制民主主義だからであり、正統性を持たせるためである。なので、1つの共通の問題に焦点を当ててみんなでゆっくりと解決していくことが大事である。

(8) LSUと若者団体の予算

LSUは政府から直接3.2万skr(約4500万円)を資金として受けているが、それは加盟団体に配るのではなく、LSUのプログラムなどに使われている。MUCF¹⁶がLSUとは別に若者団体向けのお金として、政府から212万skr(約3億円)をもらっていて、それを106の若者団体に分配している。LSUもたまにもらうことがある。212mkrのうち、50%は全団体にコア予算として補助金の形で分配される。残りの25%ずつは支部や支社などの規模、メンバーの数に応じて各団体に分配されている。

¹⁶ MUCF=スウェーデン市民社会庁(英訳: Swedish Agency for Youth and Civil Society)

2. FRIENDS PROGRAM



出所：friends ホームページ¹⁷

(1) 施設概要

「幼稚園・学校・スポーツクラブで起こるいじめを止める」というミッションのもと 1997 年に Sara Damber 氏（女性）によって設立された非営利組織であり、①研究②教育③アドバイスの3つの柱を掲げながら、ウメオ、ストックホルム、ヨーテボリ、マルメの4つの都市で活動している。彼女自身も中学生の時にいじめに遭い、クラスのリーダー的存在であった一人の男子生徒に助けられた経験を持つ。その後、いじめの経験を伝えるために講演会を開くようになり、19歳のころに Friends を設立した。

スウェーデンでは、国が定めた法律の中に差別禁止法・学校教育法という法律が存在し、子どもたちが受ける差別的行為や嫌がらせに対して、どのように対処していくかを各学校で計画を立てることが義務付けられている。Friends はそれらの計画作りを支援するプロジェクトを、依頼を受けた学校に対して行っている。また、子どもの権利問題の社会的重要性を世論に訴える世論喚起や、教師や学校運営者の置かれている環境が良くなるように政治家に働きかける活動もしている。資金については、3分の1が学校やスポーツクラブで、残りは銀行など民間や個人からの寄付金で運営している。視察期間中には、コンビニエンスストアのセブン・イレブンでシナモンロールを買うと、売り上げの一部が Friends に寄付されるキャンペーンが実施されていた。

(2) 活動内容

Friends は、(ア) 研究 (イ) 教育 (ウ) アドバイスの3つの柱を掲げて活動している。

(ア) 研究

ストックホルム大学の児童・青少年学科の協力を得ながら、子ども・若者世代の SNS 上で起きるいじめを研究している。また、心理学者でありストックホルム大学の教授の Ann Frisen と Sofia Berne とともに Friends のプロジェクトがより効果的になるように研究を進めている。

¹⁷ <http://friends.se>

(イ) 教育

スウェーデンでは 60,000 人の子供と園児がいじめを受けており、これは各クラスに 1, 2 人がいじめを受けていることになる。多くの子どもたちを苦しめているいじめをなくすために Friends は毎年、46,000 人以上の教員や保護者、子どもたちに教育をしている。Friends のアプローチの仕方としては、教員や学校運営者だけでなく生徒と親も巻き込んでプロジェクトを進める「学校全体アプローチ」を採用し、学校法・差別法と学校教育庁が出している勧告にもとづいて Friends が作ったプロジェクトを対象地となる学校やスポーツクラブで導入している。

(ウ) アドバイス

子供たちに対して起こり得る差別行為に対して、平等的に対処する方法を組織レベルで構築するためのアドバイスをしている。

大人の意識を変えることは、いじめの早期発見につながると考えており、大人がいじめや差別問題に対して経験主義的・主観的に判断しないようにするために、大人に対して、いじめが起きる原因や構造を教える研修を行っている。「大人が経験主義的・主観的に判断する。」というのは、例えば、子どもにとって自分がいじめられないよう自分を守るためのコミュニケーションの仕方を、大人が「あの子はこういう子だから。」「これがその子の性格なのだ。」という偏見で判断してしまうこと。また、子供たちにとってみればいじめだと思ふようなことも、教師の判断でいじめと認識されない場合のことをいう。

図表 3 いじめが発生するレベル別の原因

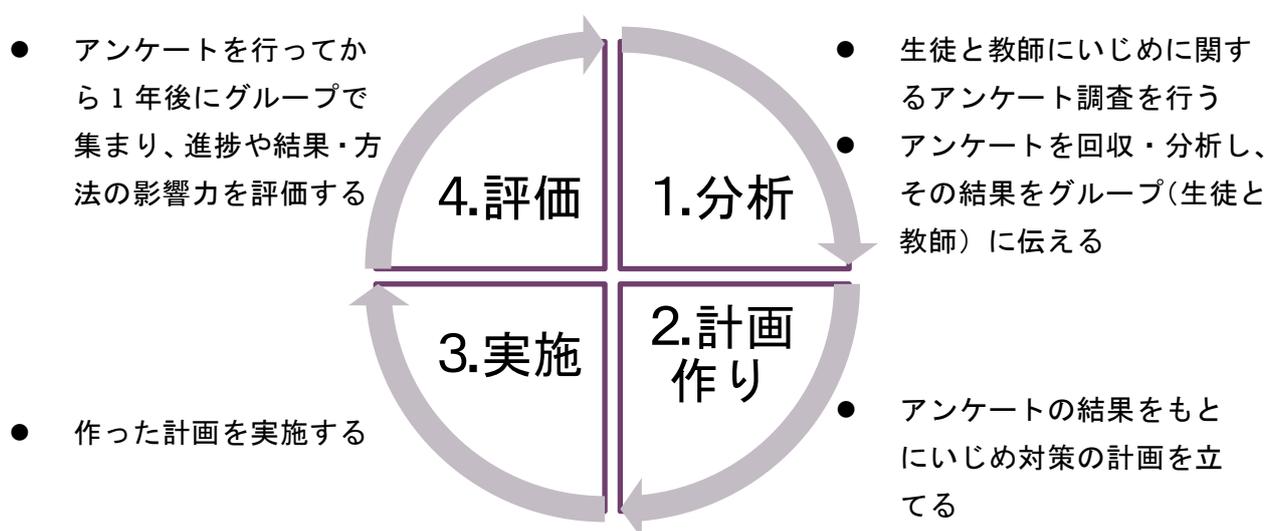
| | |
|-------|---|
| 社会レベル | ジェンダー規範による行動の制限 → 振る舞いが男らしい女の子が他と違うからという理由でいじめられる |
| 組織レベル | 人の流れが激しい、組織自体が上手く行っていなかった場合に発生しうる |
| 団体レベル | 自分たちのグループを作るために他人を排除しようとする感情、権力の構成が作られることで他人を利用して上に行こうとする |
| 個人レベル | 価値観の違い、空虚感などの小さなレベルから起きる |

出所：ヒアリングをもとに筆者作成

(3) プロジェクトの内容

各クラスから出る代表の生徒、教師、学校運営者の3つのグループに分かれて、いじめ対策のための3カ年計画をそれぞれのグループで企画・実施をする。大人だけの意見だけでなく、当事者である生徒たちの意見も聞くことでより良いプロジェクトを行うことができると考えており、生徒も主体的になってプロジェクトに参加できる仕組みをとっている。校長などの学校運営者側に問題解決しようという志がある学校ほど、プロジェクトの効果が高くなっているという特徴がみられる。

図表4 Friend programが学校内で行うPDCAサイクル



出所：ヒアリングをもとに作成

(4) 対象

Friendsは、いじめ問題が最も起こりやすい学校だけではなく、幼稚園とスポーツクラブにも活動の幅を広げている。スポーツクラブでは、学校とは異なり、基本的にボランティアベースで行っており、プロジェクトに参加するかどうか希望制であるため、学校よりもやりづらさを感じるという。参加する子供も、関心のある親に連れてこられて参加する子どもが多い。それでもなお、スポーツクラブにも活動の幅を広げる理由としては、約90%の子どもたちが学校終了後にスポーツクラブに通っているスウェーデン社会の中で、学校に加えてスポーツクラブにもプロジェクトを導入することで、一日を通して、あらゆる時間で子どもたちが安心安全に過ごせるようにするためである。また、学校だけでなく地域にもFriendsの考え方を根付かせるというねらいも持っている。

(5) 地域からの協力

Friends は、要請を受けた学校に対してプロジェクトを行っている。そのため、すべての学校でプロジェクトを行えていないのだが、ある地方の銀行が、資金を調達して市の行政に市内の学校が Friends のプロジェクトを受けられるように支援してくれたことがある。

【Friends program ヒアリング時の様子】



3. 子どもオンブズマン

(1) 概要

子どもたちのためのオンブズマンは、児童の権利に関する国連条約（CRC）に基づいて彼らの権利と利益を代表する政府機関である。CRCの54の条項の全てに18歳までの子どもには権利があるとされており、その権利には基本的なもの、例えば、自分たちの声をきいてもらう権利や情報を提供してもらう権利などがある。子どもオンブズマンはCRCがコミュニケーションやランディング、各地域や自治体で遵守されているかを監視する役割を担う。国内で機関そのもの自体はよく知られているが、具体的な活動等はあまり知られていない。地域レベルでも独自にオンブズマンというのをやっているところはあるが、基本的に子どもオンブズマンは国レベルだから連帯関係はない。ウプサラという都市には子どもオンブズマンがあるがこちらとも連絡・連帯はない。

先進的な立場から子どもの権利を尊重するために、スウェーデンでは他の国がやっていないことをやろうとしている。条約を尊重し従うことを昔から長い時間をかけてしているが、条約を国民が尊重するには、まずCRCについて多くの人に知ってもらう必要がある。しかし、法的な文章は難しいため、シンプルなスウェーデン語で書かれたテキストの作成、CRCに関する分かりやすいポスターの制作をしている。中でも、子どもたちにアピールするための良い方法は、学校にポスターを貼る等の周知活動をすることである。学校とは直接的には関係していないが、特別なプロジェクトでは連帯している。BE0という子どもの法的な案件に対応するオンブズマンのポジションのものがある。BE0は子供向けの社会福祉施設（学校で何かあった時に連絡する施設）であり、この方がもっと学校と連絡しているため、どちらかといえば子どもオンブズマンはBE0とかなり密着している。

(2) 組織について

スウェーデンでは、1990年にCRCを批准。その条項を尊重するために1993年に子どもオンブズマンが設立された。

“子どもオンブズマン”の代表を6年任期で政府が任命しており、今はFredrik Malmbergがその職務にあたっている。彼は2008年から既に6年間勤めているが、その後3年間の延長を命じられた。彼はもともとSave the Children（子ども支援専門の国際組織）の代表であり、6～7年間アフリカでの駐在経験があるなど国際的な経験が豊富な人である。子どもオンブズマンであるFredrik Malmbergの下に3つのユニットがある。

(ア) コミュニケーション・ユニット（広報部）

出版物（CRC とその実装についての情報や教材）を世間に広める役割をしている。

(イ) プログラム・アンド・リサーチ・ユニット

様々な人からの質問を受け付けており、子どもからの相談には、「なぜ 15 歳にならないとコンサートにいけないのか？」や、「門限 10 時と親に決められたが、なぜ守らなければいけないの？」などの日常的質問から、「両親が離婚したけどお母さんと一緒にいたい。」などの複雑な家族問題による質問、身近な大人に聞きにくいような質問まで多様に寄せられる。大人からは子どもの保護や心理ケア等の特殊で具体的な相談が多い。

子どもからの質問には 1 週間以内、一般市民からの質問には 3 週間以内に必ず返答している。質問の受付はウェブサイトと電話でしており、子どもからの電話には 9 時～15 時、一般の人は 1 日のうちの決められた 2 時間（10～12 時）のみとされている。基本的には子どもたちのための団体であり、子どもは学校にも通っているため、大人よりも長い時間電話を受け付けている。また、大人は電話での相談が多いのに対し、子どもは電話の代わりに Email を送ってくることが多く、特に子どもが家にいる夏場の時期に多い。

そのほかに、月に 1 回、ある学校のクラスで問題となった事柄を子どもオンブズマンに質問する機会が設けられ、1 つテーマを設けて子どもたちとチャットでやり取りをすることがある。完全公開ではないが、個人情報を隠してからインターネットでそのチャットの様子を一般にも公開している。

(ウ) アドミニストレーション・ユニット（経営部）

その他に職員は 25 名在籍している。彼らは様々な社会的背景を持っており、法律に詳しい人やソーシャルワーカーだけでなく、メディア関係やコカ・コーラ等の一般企業で働いていた人もいる。

(3) 予算

毎年、補助金として政府から 2400 万 SEK（約 5 億円）受けている。企業等からの補助金はない。

(4) 活動内容

(ア) 5年ごとの計画目標の設定

子どもオンブズマンは、スウェーデン政府は国連に対して5年ごとに活動報告をしている。毎年トピックを決めてレポートを作成しており、子どものための改善を目的として分析・提言された事柄を含む。

(イ) 情報を提供し、世論を構築する。

CRCが法でないためまだ国民は従う義務がないが、CRCの法律化を目指しアドボカシー活動をする。

個々のケースにも対処できるようにしたい。ノルウェーはもっと先進的であり、すでにCRCの内容を法律化している。

(ウ) 国際的な協力

様々なヨーロッパの国とCRCを促進するために国ごとの解釈、政策、実現された形の違いなどを議論し、自分の国でできていないことに気付いたり、自分の国のことを紹介するなど、新しいことを始めている。

(エ) 子どもの権利が守られているかチェックするために情報を要求する。

他の公的機関から情報（私的な情報も可）をもらうことができる。

子どもが問題に巻き込まれていることを知った場合は、個々のケースに干渉することはできないが、直ちに社会福祉施設に報告書を提出しなければならない。

(オ) 政治家に若者たちの声を直接届ける。

子どもが職員と一緒に自分の状況を表現する動画を作成したり工作することを通して、言葉で伝える事が苦手な子どもたちも直接政治家に自分の状況を伝えられるような機会を設ける。政策に子どもの意見が反映されることで全ての子どもたちにとって少しでも良いものになるようにしている。実際に、子どもたちの意見を政治家に伝えて、政策がここまで変わったというケースはまだないが、子どもの作った動画等を政府機関で見せると、作りはとてもシンプルだが影響力がある。心的なケアを受けているような子（ベルトで固定されなければならない子どもたち）のレポートをまとめ、政治家に見せた際には、政治家はそのような問題件数がどれほどかを調査した。また、その調査を受けて政府や政治家が子どもの訴えた問題の状況改善のためにきちんと動いているかを、子どもオンブズマンが監視するようになった。

(カ) 親への啓発活動

生まれたばかりの乳児にも権利があることを、はじめて親になった人を対象に啓発活動している。

(キ) 統計データへのアクセス

(5) 具体的な活動例

(ア) Breaking the Silence (子どもや若者の精神的な問題に対しての社会的支援(2014))

子どもオmbズマンでは2013年の1年間、専門家に助けを求めていた60以上の小児及び青年と対話をした。また子どもたちの観察や認識についての知識を専門家から学んだ。その翌年の2014年に、子どもたちの精神衛生上の問題に対処するために、これら前年の対話に基づき、報告書を作成している。

(イ) From The Inside

犯罪を犯し、刑務所にいる子どもたちにも権利があることを示したレポートの作成。このレポート作成にあたり、実際に刑務所にいる15歳以上18歳以下の子どもたちと面会した。子どもの生の声をそのまま反映することを重要だと考えているため、他のレポートを作成する時も統計や、第三者からの話ではなく、実際に子どもたちのところまで足を運んで直接話を聞いている。

(ウ) Young Speakers

子どもたちの意見を聞く方法で、様々な機関が子どもたちや若者の意見を取り入れたいというときに使える方法論である。子どもたちを専門家として考え、言わなければならないことを少しでも子どもたちの口から話してもらうことが重要であるという考えより作られた。子どもや若者の声を聞くようなすべての機関のために存在し、Young Speakersの手法の詳細が書かれた冊子の内容は、若者も読めるようなポップなもの(漫画のようなもの)にするなど多くの人が手に取れるよう工夫されている。

第5章 まとめ

1. 視察メンバーから

(1) 視察メンバーの感想

(ア) 土肥 潤也

まず、昨年に引き続き大学在学中に2度もスウェーデン視察に訪れることができたことに助成をしてくださったスカンジナビア・ニッポンササカワ財団をはじめ、多くの方に感謝を伝えたい。

今回の視察をひとつの言葉で表現するならば、圧倒的な「人権 (human rights)」概念の根付きであった。しばしば、日本において「人権」という言葉は、身勝手な権利主張や自分を正当化するために使われることが多い。しかしながら、スウェーデンでの人権概念は他者の人権の尊重のもとに語られていた。こうした理念的な発展があるからこそ、スウェーデンは若者をひとりの市民として社会参画する機会を提供をしているのであろう。

さて、では私たち日本人はこれを受けて何を学ぶことができるだろうか。日本では、国の「まち・ひと・しごと創生法」を受け、全国の地方自体が総合戦略の策定に取り組んでいる。特にメインテーマは若者の人口減少である。私の住む焼津市でも、総合戦略の柱に「若者と共につくるまち」が取り上げられ、若者がどうやったら地域に残ってくれるか、どうやったら若者に選ばれるまちになるかについて、必死に取り組んでいる。全国でも「若者会議」や「子ども議会」などを代表例に、人口流出対策としての子ども・若者参加の取り組みが次々と現れている。

しかし、これらの取り組みの理念に「人権」という言葉はあるのだろうか。どれほどの自治体が社会を共に担う主体として若者を位置付けているのだろうか。私たちに求められているのは、こうしたスウェーデンの先進的な「取り組み」を真似することではなく、日本的な文脈での「人権概念」をより発展させていくことである。そうすることが、日本が本当の意味での創生になると私は確信している。この確信を現実にするためにより一層、日本の子ども・若者参画に貢献していきたいと考えている。

(イ) 秋山 千奈美

わたしがスウェーデンで過ごした10日間で感銘を受けたことの内から、1つをここで取り上げたいと思います。それは、学校でのいじめを隠そうとせず、解決に向けて校長先生を筆頭に学校全体と外部機関とで協力するという姿勢です。日本の学校では、いじめがあることはその学校にとって悪いこととされます。そのため、学校内部（校長や教師等）から外部機関へといじめの問題をわざわざ持ち出すことはほとんどありません。しかし、フレンズプログラムを訪問した際に、スウェーデンでは校長や生徒から要請を受けて、いじめ問題を解決するための様々な対策を学校とフレンズプログラムとで協力して考えていくと聞きました。その対策としては、いじめの段階を4つに定め、教師のいじめに対する認識を統一させたり、

より正確な現状を認識するために子どもたちと直接関わったりすること等でした。ここではフレンズプログラムのいじめ対策の例を出していますが、訪問した施設のほとんどの方が口を揃えて言っていたのは、「子どもたちとコミュニケーションをとるならば、自分が子どもたちの輪に入り、直接子どもの言葉を聞くことが何よりも大事だ。」ということでした。大人が大人だけで子どものことを考えようとしても、それは所詮大人の考えや発想です。大人が、子どもは子どもと一線を引くのではなく、適切な場面で自分と対等な存在として子どもを尊重することが、本当の意味で子どもを知ることに繋がるのだと思いました。

(ウ) 荒木 将英

私がスウェーデンに行こうと思った理由は、YECの活動の原点が北欧にあるからである。

「どのくらい民主主義が進んでいるのだろうか、若者の様子はどんな感じなのか、そもそもスウェーデンはどのような国であるのか」、純粋に初海外ということもあって、期待と不安交じりであったことを覚えている。

スウェーデン視察を通して僕が感じていることは若者であること、大人であること関係なく誰もが社会を作る一人であると自覚していること、一人の人間として尊重されていることである。

前者は青年部を訪問した時に同年代の方々と話をする機会を感じたのである。その時の話の墓で彼(19歳 政治家)は「政治家は国民の代表なんだから民意を反映させることは当然だろ！」とはっきり言った。別の彼(17歳 高校生)は「自分の意見が社会に反映されていると思うよ」と言った。そのときの驚きはまだ覚えている。

後者はストックホルムの駅で街頭アンケートを行っていた時のことである。その日は移民や難民に対する人種差別撤廃を訴えるデモを行っていた。こういったデモは毎週のように行われている。そしてこういった国民の声が国の政策に反映している。実際、スウェーデンは移民の国であり、とても人種が多様な国である。たとえどんな人やどんな人種であっても一人の人間としての権利がしっかり発達している。だから移民を受け入れる。多様性が認められている。

今の日本において、社会はとても遠い存在のように思われる。若者はその遠さのために社会に参加できないと考えがちである。また、若者の社会参画について応援してくれる大人の存在が周りにいない。私たちの活動を通して一人でも多くの人が、自分の身近なところから変えていく経験ができ、そのために頼りにできる人や場所となり、社会は打てば響くものであると若者が自覚をすることを目指していきたい。

最後に、顧問の津富先生をはじめ、助成金をいただいたササカワ財団、現地で通訳をしてくれた達平さん、視察をコーディネートしてくれた土肥さん、YECメンバー、親に感謝申し上げます。

(エ) 鈴木 直久

まず、今回多くの支えのお陰でスウェーデンに視察に行かせていただいたことに感謝したいと思う。こうして若者の社会参画が進むスウェーデンに実際に足を運び、多くのことを感じる事ができて、とても良かった。

スウェーデンに行き、感じたことは主に二つある。一つ目は、当たり前のことを当たり前に行っているということである。日本も批准している子供の権利条約について、日本の子供はその詳しい内容、そこで自分たちに保障されている権利を理解しているとは言えず、ましてやこれをもとに自分たちの権利を主張することなどほとんどない。しかし、スウェーデンではこの条約に基づいて、当たり前を法を整備し、当たり前で子供が権利を主張し、当たり前で大人がその権利を守る。単純なことではあるが、日本にはないその姿勢に感心した。

もう一つは、政治との近さである。スウェーデンの若者には政治家と触れ合う場が日本と比べて圧倒的に多い。大人だけでなく若者自身が政治家と対面する場を積極的に作り出している。そして、政治家の中にも「若者がこれからの社会で一番長く生きるのだから、若者の意見を聴くことは当然である」と考え、積極的に若者を意思決定の場に参加させている。日本では、若者は知識がなく、未来を担う存在として彼らが社会の決定に参画することは敬遠されがちである。スウェーデンではこういった考えがあるからこそ、19歳や20歳で議員になる若者が当たり前にいる。

この視察を通して日本にはない考えや価値観をたくさん学ぶことができた。日本がより良い社会になるために、学んできたことを少しずつ日本に発信していきたい。

(オ) 加藤 麻佑

「若者にしか見えない問題や考え方があって、それらと年配の世代の経験を合わせることでよりよいスウェーデン社会を作っていける。」MUFで出会った政治家が放った言葉にスウェーデンの若者政策の根源を感じた。スウェーデンの若者政策は日本と比べて進んでいると視察前に聞いていたが、どのようなことが行われているか正直いって想像できなかった。なぜなら私は日本で若者政策というものを実際に感じてこなかったからだ。

私が今回のスウェーデン視察で特に印象に残ったことが二つある。一つ目は若者の声を尊重するという体制がスウェーデン社会に根付いており、そして若者自身もしっかりとそのことを自覚しているということである。企業は若者が企画したプロジェクトのスポンサーに協力的になったり、若者の主張が実際に社会に反映されたりする。耳を傾けてくれる人たちがいる、社会があると分かっているからこそ安心して積極的に若者たちは自分たちの考えを主張することができるのだと思う。

二つ目は大人たちが若者たちの可能性を信じ、若者たちが未来へ目を向けるような環境を整えていることである。スウェーデンの若者はユースセンターなどを通じて日本では料金を払わないとできないような様々な体験ができる。ほんの少し好奇心を持たれば気軽に挑戦ができる環境に若者たちはいる。挑戦できる選択肢が多く用意されているということは、その分若者たちの可能性が広がり自分の将来に向き合いやすくなるのではないだろうか。

スウェーデン視察から私は若者政策というものは大げさなものではなく、若者の声を聴いたり、若者と大人と協力して一緒に行動を起こしたりと民主主義国家ならば本来ならごく当

たり前に存在するはずのものだということ学んだ。当たり前のことを当たり前に行えるように常に日本の現状をみつめどうしたら達成できるのか考えなければならない。

(カ) 魚取あすか

スウェーデンでの9日間は圧倒されることばかりだった。多くの団体や施設を訪れたが、私が最も印象深かったのは保守党青年部だ。17歳からのメンバーがいるにもかかわらず、政治への参画意識は大人並みだ。青年部では、第一に自由主義を重んじていることが印象強かった。自由主義だからこそ、自分たちが好きなように活動していく権利があるという考えが根本にある。コミュニケーションに対しても若者の目線でさまざまな提言をし、実際に条例を改正させた例もあると聞いた。議席も用意されていることに驚いた。中でも感動したことは保守党議員の青年部や若者に対する考えが非常に柔軟で、積極的であるということだ。訪問時に偶然お話を伺うことができたが、若者の意見は創造的かつ新鮮で国にとって貴重なものであると仰っていた。スウェーデンには若者の勢いや熱意だけでなく、それを受け止める大人たちの柔軟さがある。日本では若者は煙たがられ、政府や政党への影響力は極めて低い。両国の決定的な違いは、若者に対して上から目線に対応するのではなく、一個人として同等に接することだ。若者の発信力・影響力を高める環境を作り出していくためには、若者・大人共に意識改革が今後の課題となる。大人たちがずっと持ってきた固定観念を拭き去るのは不可能かもしれない。しかし次世代のために、少なくとも我々が大人になったときに若者に対する考えが今と変わっているように、これからの活動を通して働きかけていくことが重要だ。今回このような機会を与えて頂けたことに感謝し、未来の日本の担い手として今後の活動に励んでいきたい。

(キ) 大野 彩佳

私がこの視察に参加しようと思ったきっかけは、YECではよくスウェーデンが若者政策の先進国であるといっている。そこで、実際どのような社会づくりが行われているのか気になり、この目で確かめたかったからである。

スウェーデンに来て、いろんな施設を訪問する中で、若者に対する意識が日本とは大きく異なっていると感じた。どの施設でお話を伺ったときでも、“若者には能力や可能性があることを信じている”という言葉が出てきて、大人が若者に積極的に関わろうし、しかもひとり一人の価値を認め、受け入れようとする姿勢がとても素晴らしいと思った。若者の意見を真摯に受け止めてくれるから、自信がつき若者自身ももっともっと何かしたいと自分の気持ちを出していけるのだと感じた。

また、社会との距離が近いことに驚愕した。政治家に質問することが出来たり、若者の意見を実際に反映させてくれたり、日本では考えられないようなことである。これが当たり前であると言っていたのが印象的で、国民が権利を自覚しているからこそだと感じた。

スウェーデンで学んだ様々なことを日本に活かしていきたい。

この視察の実施にあたり、助成をしてくださったササカワ財団さんをはじめ、通訳と案内をしてくださった達平さん、顧問の津富先生、スウェーデンでの視察先の担当者の方々、YECメンバーなど関わってくださったすべての人に感謝申し上げます。

(ク) 横葉 美菜

私は、この春から YEC（若者エンパワメント委員会）で活動を始めた。「スウェーデンって、すごいところなんだよ！」と勧誘され、活動を始めてからも幾度となく先輩からスウェーデンの魅力を聞いた。話を聞いたたびに、私もすごい！とは感じていたのだが、やはり実際に見ると聞くのとでは大きく違った。スウェーデンが行う若者政策は子どもたちにたくさん可能性を見出してくれるものであるように感じた。視察では、若者の余暇活動を支援するユースセンターや、いじめ問題に取り組む NPO 団体、若者が主体となって運営される政治団体など様々な団体を訪問させてもらった。訪問先ごとに活動内容も特徴も異なるのだが、どの団体も若者と一緒に活動しよう、若者の意見を聞こうという姿勢が手にとって見えた。この視察中、「なぜ、若者を支援しようとする団体がこんなにもあるのだろう。」という問いが、ふと頭の中に浮かんだ。

そして今、視察を終えた私が、この問いに答えるとするならばそれは、「スウェーデン社会全体に、若者は未来を担う国の宝だという考えが浸透しているから。」と答えるであろう。この考え方は、日本の「子どもは、大人が守ってあげなければならないもの。」という考え方とは大きく異なると、いち若者の私は感じた。この夏行ったスウェーデン視察で、私は多くのものを目で見て感じ、多くのことを学んだ。視察に行けたからこそ得られたこれらの学びを、これからの日本社会に還元していきたい。

参考文献・URL

- アグネ・グスタフソン(2004)『スウェーデンの地方自治』(自治体国際化協会訳)
- アーネ・リンドクウィスト, Lindquist, A., & ヤン・ウェステル Jan. (1997).
Wester (著), 川上郁夫 (訳)『あなた自身の社会, スウェーデンの中学教科書』
- 特定非営利活動法人 Rights スウェーデンスタディツアー報告書(2010)
- YEC (若者エンパワメント委員会) スウェーデン若者参画ツアー報告書 2011
- YEC (若者エンパワメント委員会) スウェーデン視察報告書 2014
- 津富宏 「社会的排除の被排除者である若者の主体化を支える文脈形成に向けて」
- 小林庸平(2010b)「スウェーデンの実例から見る日本の若者政策・若者政策の現状と課題」
『季刊 政策・経営研究』2010 Vol.3
- 宮本みち子(2006)「EU における若年者雇用と若者政策」樋口美雄・財務省財務総合政策
研究所編著『転換期の雇用・能力開発支援の経済政策』日本評論社
- 宮本みち子(2005)『比較文化研究—若者とジェンダー—』放送大学教育振興会 14 章・15
章
- Commission of the European Communities(2001) European Commission White Paper – A new
Impetus for European Youth.
- Tatsumaru Times: <http://tatsumarutimes.com>
- Fryshuset ホームページ: <http://fryshuset.se>
- BirkaGarden ホームページ: <http://www.birkagarden.se>
- KFUM ホームページ: <http://www.kfum.org>
- LSU ホームページ: <http://lsu.se/english/>
- Friends program ホームページ: <http://friends.se>
- 子どもオンブズマンホームページ: <http://www.barnombudsmannen.se>



すべての若者が思いを形にすることを通じて、

社会のつくり手となるために。

YEC -Youth Empowerment Committee-

E-mail: yec.information@gmail.com

HP: <http://youth-empowerment.jimdo.com>